二畳茶室の躙口（にじりぐち）を開けると腰高の障子越しの光に満ちたリビングが広がる。茶室の床が上がっているので、リビングのソファに座る人と視線の高さは同じになる。

# マンションの一室に置かれた「待庵（たいあん）」

## 井上邸（東京都港区）

改修設計 新素材研究所

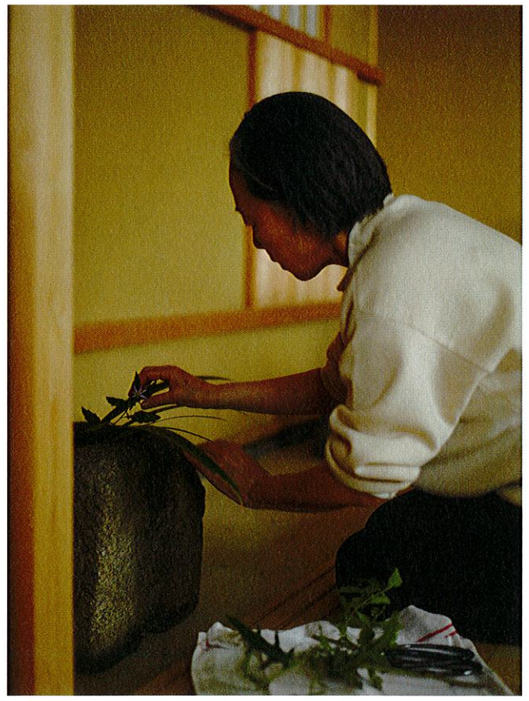
取材・文／渡辺未央（編集部）　撮影／本多康司

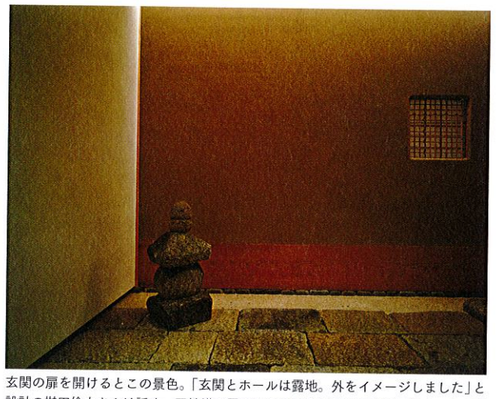
右ページ／茶室は玄関を入った正面に位置する。隅柱は槐（えんじゅ）。聖なる木の意味を持つ。下地窓のあるエリアが水屋で、へぎ板張りの建具ですっぽり閉じることができる。白い坊主襖が茶道口。小上がりの足元、躙込みに見える小さな四角い部分はプッシュ式で踏み台が出てくる。懐石の配膳時に上がりやすいようにという配慮。右手の格子戸がリビングに通じる。左２点／リビングから見た茶室。鳥の子紙張りの３枚引き戸を開けると、躙口とその前の加茂真黒の踏み石、連子窓、下地窓、蹲踞……。いかにも茶室らしい意匠が現れる。

# 聖なる木、槐（えんじゅ）を隅柱にした機能的な茶室

上／茶室前に据えた蹲踞（つくばい）は五輪塔（ごりんとう）の塔身を転用したもの。側面には梵字が見える。ここに花をあしらってお客さまを迎えることも。下／花をいける井上保美さん。花材は野の花で、「友人が摘んで持ってきてくれたんですよ」。その可憐な姿が井上さんの人柄と重なる。左ページ／躙口から席内を見る。連子窓の竹の本数は現場で決めたとのこと。躙口の脇に小壁があり、席内の右手の壁と距離が生まれるので、土壁を着物や衣服でこするといった心配がない。

蹲踞には野の草を
客人をもてなす心が表れる





玄関の扉を開けるとこの景色。「玄関とホールは露地。外をイメージしました」と設計の榊田倫之さんは話す。五輪塔が置かれた床は市電敷石で奥が三和土。左の壁は漆喰、正面は土壁で茶室の「外壁」でもある。

## お茶の持つ物語を、家づくりの中心に

「どうぞー」と玄関の前で明るく迎えてくれた井上保美さんに促され、扉の先へ。するとそこは、外だった。

東京・港区に立つ、築30年のマンションの一室の改修だ。石敷きの床に外かと驚いた玄関に入ると、眼前に茶室の土壁が現れる。土壁に沿って進むとやわらかな光に満ちたリビングがある。

オーセンティックなものづくりで知られるファッションブランド45Rのデザイナーである井上さんがお茶に出会ったのは、20代の頃。その後、45歳から人間国宝、三代目今藤長十郎の奥様なほみ先生のもとで研鑽を積んだ。デザイナーとして忙しく過ごす中で、自分自身をリセットするためにお茶の持つ物語が必要だった。フランスのカフェオレボウルを使ってクリスマス茶会を開いたりと、見立てのおもしろさにも魅了されてきたという。

これが、井上さんにとって3回目の茶室づくりになる。最初は、置炉で和室を茶室にアレンジ。2回目は四畳半。大正ロマン風にしたという戸建ての家づくりに合わせ、細かくオーダーしたそうだ。そして、今回。

「せっかくつくるなら、『待庵』にしませんか?」

現代美術家の杉本博司さんとともに新素材研究所を主宰する建築家の榊田倫之さんは、茶室のある家がほしいとの依頼を受け、こう提案した。

「待庵」とは、千利休作とされる二畳の茶室だ。「江之浦測候所に杉本と一緒につくった茶室『雨聴天』も『待庵』の本歌取りでした。茶室は想像力を最大限に働かせる場所。マンションという限られた空間の中で外部のような茶室をイメージした時に、やはり『待庵』と同じ形式がいいのではないかと考えました」と榊田さん。

二畳の小さな空間では、隅炉(点前座前方の左隅にある炉)という炉の切り方になり、一般的な茶室とは勝手が異なる。井上さんも、その点で最初は葛藤があったそうだ。そんなとき『隅炉』(千宗屋著、淡交社)という本に出会い、「なんでもできちゃうんだ!」と安心した。「大切なのは、おいしいお茶を差し上げることですしね」。それは、井上さんが長年惹きつけられてきたお茶をたのしむ心とつながった。

そこからは、榊田さんにすべてお任せだったという。動線や納まりについて「私が考えるよりもずっと緻密に考えてくださっていたから」と井上さん。設計事務所との仕事に慣れている水澤工務店に施工を依頼したことも大きかった、と榊田さんは振り返る。

茶室には先日、命名者でもある杉本さんの筆による水車板古材を使った庵号「珍竹凛」の扁額が取り付けられた。待合であるリビングから躙口をくぐって仄暗いなかに佇むと、二畳の広さを身体で感じ、暗さに慣れた目がガラスの花入の一筋の紫や、床の間に掛かる飛天のなびく衣を見つけてはっとする。

リビングでは、フランスのアンティークや李朝の家具など、井上さんの眼で選ばれた国も時代もさまざまなものが、空間と心地よく調和している。

「ここに引っ越すときに、気に入っていても置いてしっくりこないものは手放しました。いままでとは違う感覚でものを選ぶようになりましたね」

それには、計算されたスケール感が関係しているようだ。たとえば、折上げ天井。2・5メートルの天井高さを確保するために床上げしなければならない範囲を整理し、床レベルを極力抑えた。また、縦格子が和を連想させる障子は新素材研究所のシグネチャーデザインだが、もともとは外国人向けに建てられたというマンションの寸法に合わせることで、洋の雰囲気もまとう。

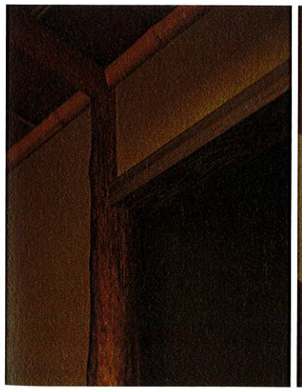
「空間の力ってすごいなと思いました」と井上さんは微笑む。

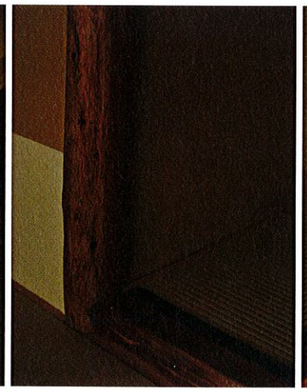
玄関とホールは茶室へ誘う露地。リビングはゆったり過ごせる待合。キッチンは茶室の向かいに位置する機能的な水屋。細部まで考えられた設計により、内と外、日常と茶室とが共存する、豊かな世界が立ち上がっていた。

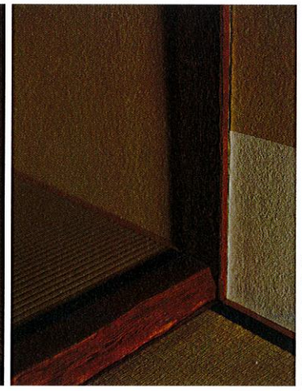
上／茶室の天井も「待庵」の構成と同じ。落天井の垂れ壁に掛けられた扁額は水車輪板の古材で、杉本博司さんが揮毫した「珍竹凛(ちんちくりん)」を彫って仕上げた。左／濃茶の道具をしつらえて。茶入れの仕覆(しふく)は井上さんのお手製。茶入れ：海田曲巷作、茶碗：辻村史朗作　粉引、茶杓：海田曲巷作　銘 天使の泪、水指：西岡小十作　朝鮮唐津。茶杓師の海田曲巷さんや古裂(こぎれ)を使った仕覆づくりで知られる上田晶子さんとの交流からも見立ての心を知ったという井上さん。いまは月に1回、若いスタッフを集めてここでお稽古をしている。

床の間は土壁を塗りまわし、奥行きに広がりを持たせた。掛け物は飛天。古材の敷板の上にレースガラスの器を置いてアザミを挿している。床の間まわりを構成する材料のテクスチャーとも符合する。隅炉の炉縁は杉の古材。

# 天井の構成も「待庵」にならう 伝統が織り込まれた二畳の茶室



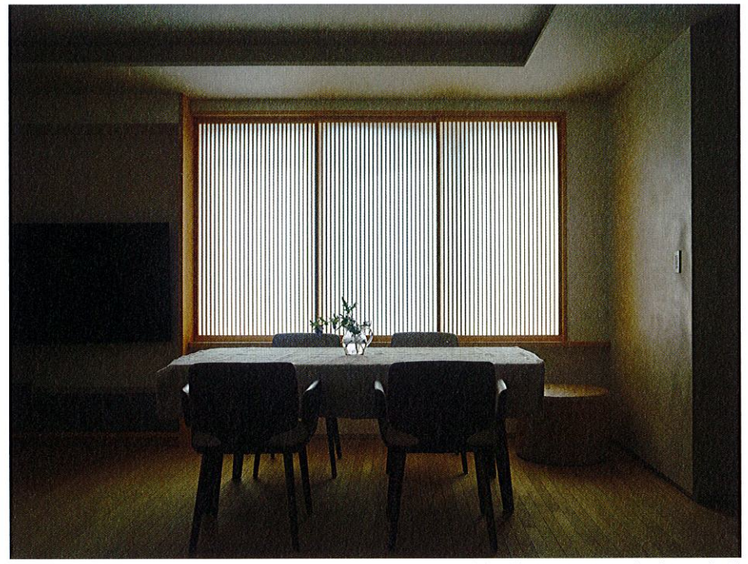




左3点／床柱は檜錆丸太、落掛は神代杉、床框は屋久杉、相手柱はクリ芯去り材にナグリを施したもの。すべて榊田さんが自ら入手した。どの材も時代を経た味わいが備わり、竣工してから1年足らずとは思えないなじみ具合だ。

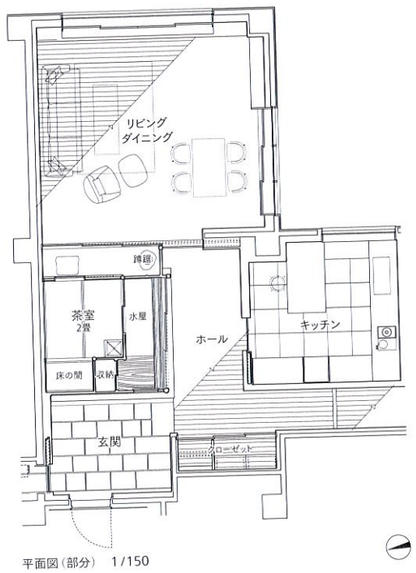
床の間の前から躙口を見返す。茶室そのものは外部に面していないが、東と南に面したリビング・ダイニングから入る光が連子窓を通して席内に届く。手がかりの開いた躙口からの一条も美しい。

# 光あふれるリビング・ダイニングは和のディテールと洋のプロポーション



茶室の横には明るいリビング・ダイニング。障子越しのやわらかな光が心地よいダイニングは、茶会のあとのひと休みにも。テーブルの上のガラスのピッチャーはフランスのアンティーク。

漆喰塗りの廊下の壁が幻想的な景色をつくる。引き戸の向こうは寝室やバスルーム、ウォークインクローゼットなどプライベートな空間だ。




平面図（部分）　1/150

**DATA**

**井上邸**
所在地／東京都港区
床面積／155.17㎡
構造・規模／RC造8階建てのうち1住戸
改修設計／新素材研究所（榊田倫之、内海美里）
施工／水澤工務店

設計期間／2017年11月～2018年5月
施工期間／2018年6月～2019年1月

おもな内部仕上げ
玄関／床：市電敷石張りt20、三和土　壁：漆喰、土壁塗り　天井：AEP塗装　隅柱：槐
ホール／床：栗フローリング　壁：漆喰　天井：AEP塗装
リビング・ダイニング／床：栗フローリング　壁：漆喰　天井：AEP塗装
キッチン／床：黄竜山石（水磨き）張り　壁：クヌギ石張りt30　天井：AEP塗装
茶室／床：畳（京間）敷き、杉板（柾目）　壁：土壁　天井：竿縁天井（黒部へぎ板、杉）
床柱：檜錆丸太　相手柱：栗古材　落掛：神代杉　床框：屋久杉　炉縁：杉古材

Photo：Masahiro Sambe

**榊田倫之**　Tomoyuki Sakakida
1976年滋賀県生まれ。2001年京都工芸繊維大学大学院工芸科学科博士前期課程修了後、日本設計入社。03年榊田倫之建築設計事務所設立。08年新素材研究所を杉本博司と設立。現在、新素材研究所所長、京都造形芸術大学非常勤講師。2019年第28回BELCA賞受賞。

**新素材研究所**
東京都港区白金3-1-15-5階
tel 03-5422-9686
http://www.shinsozai.com

井上さんが「ここで過ごすことがいちばん多い」と話すキッチン。広いカウンターで新聞を読んだり、コーヒーを飲んだり。茶会のときには動線もしっかり計算された機能的な水屋として使われる。壁はやさしいグレーが印象的なクヌギ石。